精神障害者支援ボランティア参加者の健康状態と生活満足度との関係

平　澤　泰　子　　小木曽　加奈子
安　藤　邑　惠　　阿　部　隆　春

要約

今回、A県で行われた精神障害をもつ人々に対するボランティア活動参加者の大会に参加する機会を得、精神障害者支援ボランティア参加者についての健康状態とその活動状況、生活の満足度の関連を明らかにすることとした。その結果は、健康状態と生活満足度との間には、有意な正の相関関係があった。つまり、精神障害者支援ボランティア参加者の中でも健康状態の良好な人ほど生活の満足を得ていることが窺えた。しかし、健康状態とボランティア活動状況、ボランティア活動状況と生活満足度との間には相関は見られず、健康であって初めてボランティア活動に参加する、ボランティア活動をすることが彼らの生活満足度につながるという仮説は立証されなかった。

キーワード　精神障害者支援ボランティア、参加者、健康状態、生活満足度

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　研究の目的
Ⅲ　研究の方法
Ⅳ　倫理的配慮
Ⅴ　結果
Ⅵ　考察
Ⅶ　おわりに

Ⅰ　はじめに

人間の欲求は「低次の欲求がある程度満たされないとそれより高次の欲求が発現しない(マズロー)」といわれる。また、「他者の自己実現を支援することによって、実は、自分自身が成長することができる（ミントン・メイヤロフ)」といわれる。

我々は、これら二つの視点から、『健康状態』に焦点をあて、『健康状態』を良好にしてこそ、「高次の欲求」が生まれると考えた。ここでは、「高次の欲求」を『生活の満足』と捉えた。また、メイヤロフの言う「他者の自己実現を支援することによって、実は、自分自身が成長できる」ことは、『生活の満足』につながると考えた。それを得るための「他者の自己実現の支援」の例として、『精神障害者支援ボランティア活動（以下　精神ボランティア活動)』を取り上げた。

先行研究において、「精神ボランティア活動」を進めていく意味として「相互に成長しあう」があげられている（栄セツコ他 1997）。また、他の先行研究は、「精神ボランティア活動」の意義として、「精神障害の人と一緒に楽しむ」「自分の心が豊かになる」が指摘されている（栄セツコ 1998）。鮫島は、精神ボランティア活動を行う理由は、「自分が成長するため」を調査結果から示している（2003）。このように、先行研究において、精神ボランティア参加者は、その活動を通じて自己を成長させることができることを示しているが、『健康状態』と『生活の満足』との関連を明らかにする研究は見当たらなかった。

そこで、本研究においては、精神ボランティア活動者の『健康状態』と『精神ボランティア活動状況』、そして『生活の満足』との関連を明らかにすることとした。

Ⅱ　研究の目的

本研究の目的は、精神ボランティア活動の参加者の『健康状態』と『生活満足度』に関する傾向を把握することである。

Ⅲ　研究の方法

研究の対象者は、A県で行われた精神ボランティア大会に参加し、本研究の趣旨に同意し協力を得られた 253 名で、欠損値が 3 以下の 253 名すべてを対象とした。

調査方法は、アンケート用紙に記述する方法で実施した。質問項目については、基本的な項目「性別」「年齢」「職業」、ボランティア活動の項目「精神ボランティア講座の受講経験の有無」「現在の精神ボランティア活動状況」「普段の生活の中での精神障害者と接する機会の状況」、その他の項目「問題点」「今後の活動」「ストレスの対処法（16 項目）」、そして「健康状態」および「生活満足度」については、「健康状態」では、「重病」～「大変健康」、「生活満足度」では、「大変不満」～「大変満足」を 1 ～ 10 の程度区分で回答を得た。

Ⅳ　倫理的配慮

倫理的配慮は、アンケート用紙を配布する際、本調査対象者に対して、口頭および書面で研究の趣旨と共に調査の協力は自由であり、個人名が特定されないことを説明した。アンケートの回収は、個人の自由意志を尊重する為に、会場外に提出専用のボックスを設置し、アンケート用紙提出をもって本研究への同意をしたとみなした。

Ⅴ　結果

1．基本属性

女性 209（83.3%）男性 42（16.7%）と圧倒的に女性が多かった。年齢は、60 歳代 81（32.3%）が最も多く、50 歳代 56（22.3%）、70 歳代 49（19.5%）、20 歳代 30（12.0%）と続いた（図 1）。職業は、無職 112（45.2%）がほぼ半数であり、その他主婦・パート 47（19.0%）と続いた（図 2）。

図1　年齢　N=251

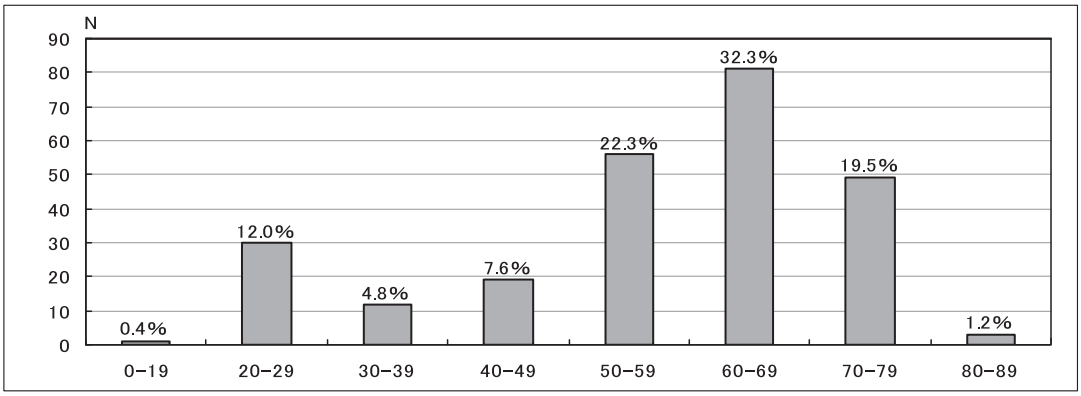
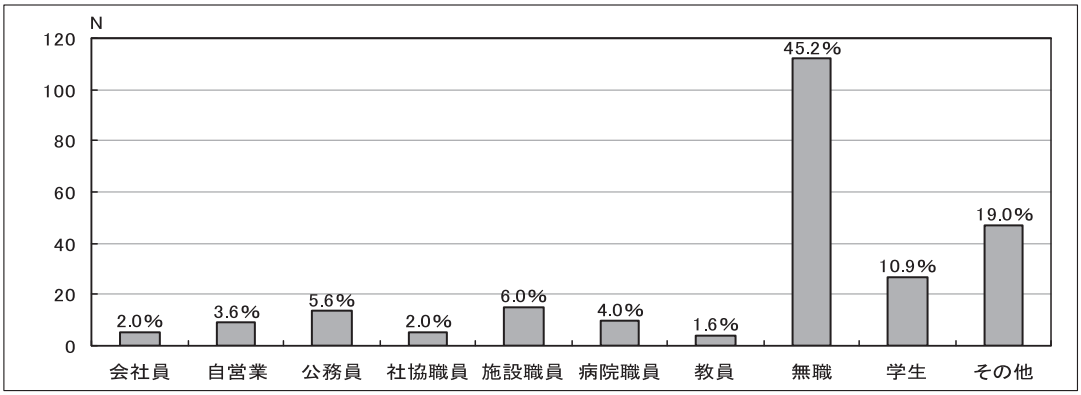


図2　職業　N=248



２．ボランティア活動

ボランティア講座の受講経験の有無については、「している」185（75.2%）と多くが受講していた。また、現在のボランティア活動についても、「している」188（75.5%）と回答し、多くが現在も活動を実施していた。精神障害者と接する機会については、「常にある」116（47.5%）「時々ある」99（40.6%）を合わせると、215（88.1%）が接触する機会があることを示した。

３．その他

問題点としては、「補助金が少ない」59（30.3%）、「専門的知識の不足」28（14.4%）が多かった（図 3）。今後の活動については、「障害者に対する直接支援活動」76（35.7%）「地域啓発の活動」60（28.2%）が多かった（図 4）。ストレスの対処法については、16 項目の中で「いつもしている」と回答の多かったものは、「物事の明るい面を見ようとする」「今の経験はためになると思うようにする」であった。

図3　問題点　N=195

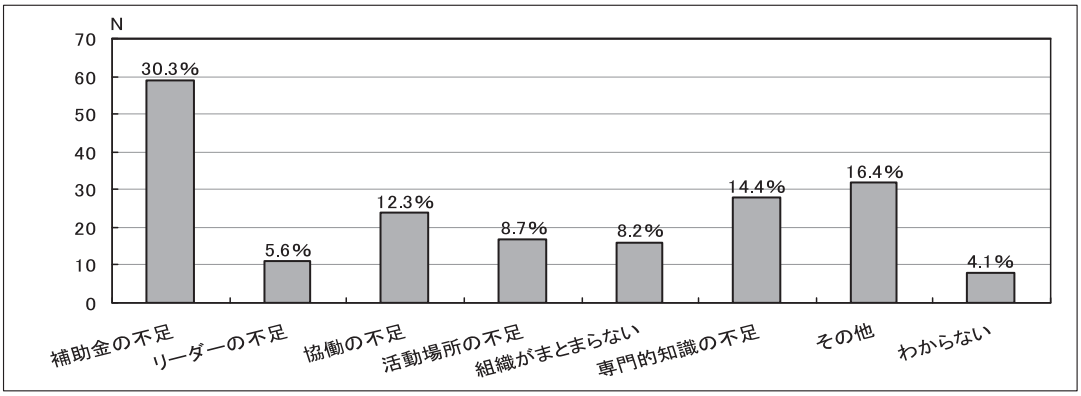
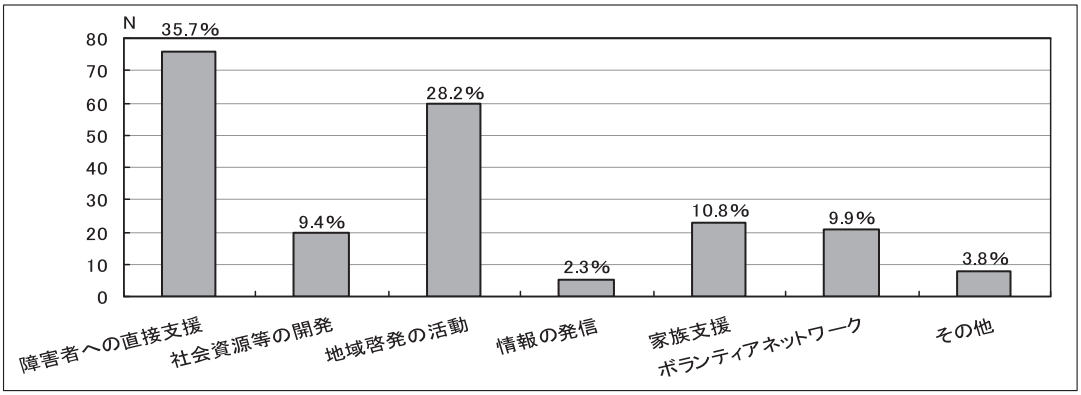


図4　今後の活動　N=213



4．健康状態と生活満足度

「健康状態」は10段階評価で、平均値6.98、標準偏差1.788、分散3.197であった。健康状態は8が63（25.3%）と最も多く、6以上が188（75.5%）であった（図5）。「生活の満足」は8が62（24.8%）と最も多く、6以上が202（80.8%）であった（図6）。「健康状態」と「生活の満足」との間には、有意な正の相関がみられた。

図5　健康状態　N=249

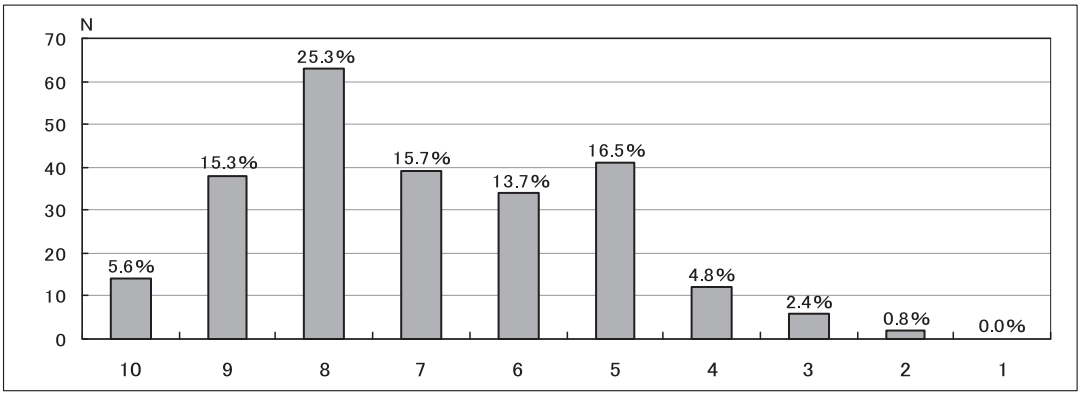
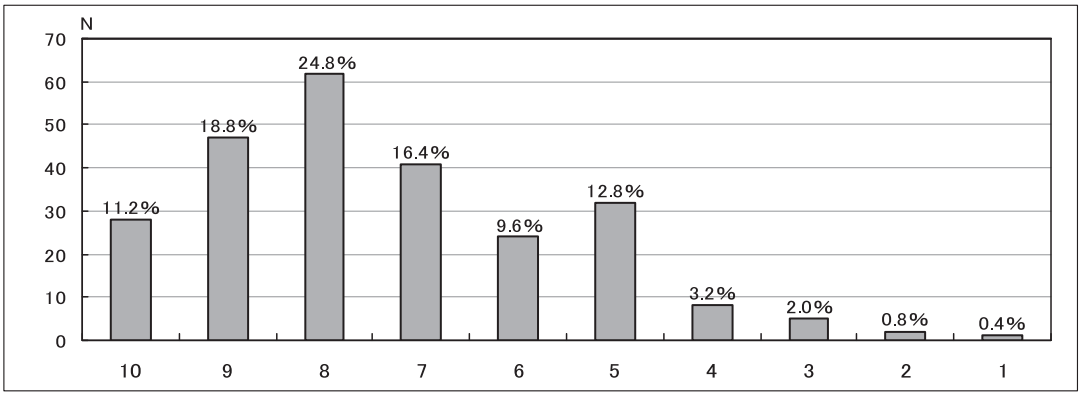


図6　生活の満足度　N=250



調査項目間の相関

		性別	年齢	職業	講座受講	ボラ活動	機会	生活満足	健康状態
性別	pearsonの相関係数	1	.001	.085	-.153*	-.116	.063	.123	-.012
	有意確率（両側）	.	.992	.186	.016	.070	.332	.053	.849
	N	251	249	246	244	247	242	248	247
年齢	pearsonの相関係数	.001	1	.131*	-.590**	-.578**	-.113	.351**	.079
	有意確率（両側）	.992	.	.041	.000	.000	.081	.000	.214
	N	249	251	246	244	247	242	248	247
職業	pearsonの相関係数	.085	.131*	1	-.069	-.141*	.118	.073	.070
	有意確率（両側）	.186	.041	.	.287	.028	.070	.258	.279
	N	246	246	248	241	244	239	245	244
講座受講	pearsonの相関係数	-.153*	-.590**	-.069	1	.634**	.120	-.267**	-.113
	有意確率（両側）	.016	.000	.287	.	.000	.064	.000	.078
	N	244	244	241	246	245	240	244	243
ボラ活動	pearsonの相関係数	-.116	-.578**	-.141*	.634**	1	.291**	-.280**	-.139*
	有意確率（両側）	.070	.000	.028	.000	.	.000	.000	.029
	N	247	247	244	245	249	243	247	246
機会	pearsonの相関係数	.063	-.113	.118	.120	.291**	1	-.012	.017
	有意確率（両側）	.332	.081	.070	.064	.000	.	.855	.793
	N	242	242	239	240	243	244	243	242
生活満足	pearsonの相関係数	.123	.351**	.073	-.267**	-.280**	-.012	1	.582**
	有意確率（両側）	.053	.000	.258	.000	.000	.855	.	.000
	N	248	248	245	244	247	243	250	249
健康状態	pearsonの相関係数	-.012	.079	.070	-.113	-.139*	.017	.582**	1
	有意確率（両側）	.849	.214	.279	.078	.029	.793	.000	.
	N	247	247	244	243	246	242	249	249

*：相関係数は5%水準で有意（両側）
**：相関係数は1%水準で有意（両側）

Ⅵ　考察

精神ボランティアをしている人の「性別」「年齢」「職業」の傾向は、50 ～ 70 歳代の女性が圧倒的に多く、男性は 60 歳代が多かった。職業は「無職」が多かった。50 ～ 70 歳代の女性が圧倒的に多いことは、どの先行研究でも明らかにされていた。その上、50 歳代が一番多く、60 歳代、70 歳代と続き、50 歳代の主婦層が中心であった。本研究結果では、60

歳代が一番多く、50歳代、70歳代と続き、20歳代が伸びを見せるという結果が出た。

これは、今後若い世代とともに年齢の幅が広がり、子どもも育てあがり仕事もし終えた元気な60歳、70歳の無職の高年齢層が活躍する時代が窺えた。今後は、ボランティア活動に参加する年代層を知るには、さらに狭い範囲での年代区分の調査分析が必要であると考える。

「ボランティア講座の受講経験の有無」「現在の精神ボランティア活動状況の有無」「普段の生活の中での精神障害者と接する機会の有無」の傾向については、ほぼ8割の人が、受講経験があり、現在も活動に参加しており、精神障害のある人たちとの接点があるという結果が出た。これらについては、先行研究でも同じことが明らかにされており、本研究においても同結果となった。このことから、本研究においてもボランティア講座を受講し、精神障害者と接点を持ち、活動を通して彼らを理解しようとする姿が窺えた。また、そのほとんどが、今後もボランティア活動をしていく意思を示しており、具体的な活動内容としては、「障害者への直接支援」、「地域の啓発」を選んだ者が多かった。彼らの多くは、ストレスに対しても「物事の明るい面を見ようとする」、「今の経験はためになると思うようにする」など、ポジティブな考えをもっていた。そして、健康状態も良好であるという結果がでた。

本研究の目的であった、『健康状態』と『生活の満足』の関係については、有意な正の相関関係があったことから、ボランティア参加者の中でも健康状態の良好な人ほど生活の満足を得ていることが窺えた。しかしながら、『健康状態』と『ボランティア活動の状況』においては、ボランティア参加者の健康状態が良好な人ほどボランティア活動に参加するということは言えなかった。また、『ボランティア活動の状況』と『生活の満足』との間にも、我々が前提としたボランティア活動をすることが彼らの生活の満足度につながるという仮説も立証されなかった。

ボランティア活動の語源は、「自発的な意欲に基づき他人や社会に貢献する行為」であり、その性格として、「自主性」、「公共性」、「無償性」、「創造性」があげられる。本研究において、回答者の多くが、精神保健ボランティア講座を受講しており、職業をもっていない、高年齢層であり、今後の活動に対しては補助金を得て、障害をもつ人々への直接支援や地域啓発をしていきたいという意思を表明していることから、ボランティア活動と生活の満足感が推察されたが、我々が仮定した説が立証されなかった。その一つの原因には、精神障害者支援ボランティア参加者には、同障害者の知人であったり、血縁関係の者であったりと、彼ら自身の健康状態に関わらず、ボランティアとしての関りを期待される状況にある者が多いことが考えられた。つまり、ボランティアに参加することを必要とされており、参加したから生活の満足度が得られるわけではない状況が考えられた。

今回の研究では、上記理由はあくまで推測の域を出ない。今後の研究においては、精神障害者支援ボランティアに対してだけでなく、身体障害者や知的障害者支援などのボランティアに対しても同調査を行い比較分析する必要があると考える。また、精神障害者支援ボランティア参加者の詳しい状況、支援動機について掘り下げ、今回の仮説について更なる展開を試みたい。また同時に、その動機を年齢別に解析することで、現在の、中高年層が多く若年

層が少ないという、日本の典型的なボランティア年齢構成の現状分析と推移に活かしていきたい。

Ⅶ　おわりに

人が生きていく上で、健康状態が良好であることは生活の基本であり、生活の満足を構成していくことは理解できた。しかし、精神障害者支援ボランティア活動は、物理的な時間のある無職の者、精神的にゆとりのある中高年層が行う傾向があることが先行研究でも明らかにされているが、今回、20歳代や30歳代、また学生の姿もあったことは喜ばしいことであった。今後、このような若者がボランティア活動に参加し、人生の経験豊かな先輩のボランティア参加者からさまざまなことを学びながら、障害をもつ人たちと「共に生きること」、「共に自己実現していく社会を構築していくこと」が大切であり、望まれる。

引用及び参考文献

右田紀久恵・井岡　勉『地域福祉　いま問われているもの』ミネルヴァ書房　1994
栄　セツコ「精神保健ボランティアとコミュニティづくり」大阪市立大学生活科学部紀要・第45号 1997
栄　セツコ「精神ボランティア活動に関する研究」社会福祉学 . 通巻 . 58. 177. 1998
鮫島光子「精神保健ボランティアの現状と役割―神奈川県内の精神保健ボランティアのアンケート調査を中心に―」精神障害とリハビリテーション 8（1）通号 15　2004
鮫島光子「精神保健ボランティアの現状と役割―神奈川県内の精神保健ボランティアのアンケート調査を中心に―」社会福祉（44）　2003
曽根直樹「精神障害者に対する地域生活支援の現状と課題」社会福祉研究 90 号 鉄道弘済会　2004
鷹尾雅裕「愛媛県内の精神保健ボランティアグループに対する実態調査」公衆衛生 Vol.65 No.3　2001
松井　豊『心理測定尺度集』サイエンス社　2001
ミルトン・メイヤロフ『ケアの本質』田村　真・向野宣之訳　ゆるみ書房　2007
ラザルス・R・S『ストレスとコーピング』林　峻一郎編・訳　星和書房　1990

Summary

A Relation of Health Condition and Their Life Satisfaction
in Volunteers Who Help Mentally Disabled People

Yasuko Hirasawa, Kanako Ogiso
Satoe Andou, Takaharu Abe

The purpose of this study is to clarify how the factors of the volunteers who help mentally disabled people; health condition, activity status, and life satisfaction, relate to each other, under a hypothesis; those who are in good health condition would do volunteer work, and doing it would make their life satisfactory. The results indicate a significant positive correlation between health condition and life satisfaction, but no positive correlation between health condition and activity status or activity status and life satisfaction. These findings indicate healthy volunteers are satisfied with their life, but did not verify the hypothesis mentioned above.

Keywords　Volunteers Who Help Mentally Disabled People, Volunteers, Health Condition, Life Satisfaction

（2010年11月1日受領）